

これは、聖・Dの伝説より2000年後位、THEドラゴンバスターズ前後のお話です。

イアン「あのう、私の名前はイアンと申しまして・・・」

タコス「私？男なら、俺だろ！オレ！せめて僕にしやがれ！」

数日前

カイアース国の北の方、山沿いの平和な村、ナワイヘ村から物語は始まる。

平和な村と言ってもまだモンスターが山から時折やってくる、少々物騒な時代であった。

今回の主人公、イアン(色白、細身、気弱そうな金髪の少年)は部屋で読書をしながら考え事をしていた。

『最近モンスター達の行動が活発化してきている気がする。やっぱり、黒THE島の封印が解けかけているんじゃない？』

黒THE島には昔、聖・Dという勇者が現れ、魔王を倒した後、魔界へと通じる扉を封印したという。

大好きな100年ほど前の探検家、クレア・バイルのアクア諸島来訪記を読みながら、イアンはそう考えた。

ちなみに、イアンの家はナイワヘ村ではかなり大きい。父親は先の大戦でモンスター相手に大活躍した英雄、母親もかなり有名な大魔法使いで、炎の魔女と呼ばれている。

父親は今も世界のどこかで戦っていて、イアンの家にはたまに父親が送ってくる冒険譚とか、地域の歴史のような本がたまっていて、ちょっとした図書館のようになっていた。

母親は引退して、今は普通の主婦として暮らしているが、それでもたまにどこかの国などに呼ばれて魔法使いとして戦うこともあった。とりあえず今は家にいる。

という訳でイアンは一人部屋で本を読むことが多くなり、田舎者の割には学者も関心する

ほどの知識を持つ反面、歴戦の英雄2人の息子とは信じられない位、気弱だった。パッと見女の子に見えるほど細身で、色白、自分のことも私とか僕と呼んでいる。顔立ちは悪くない。身長も低くはない。

そんなイアンは17歳の誕生日をキッカケにある決意をした。

イアン「あのう、母さん、僕、冒険の旅に出たいんだけど・・・」

イアンの母(フレイヤ)「あら、行ってらっしゃい」

イアン「え、反対しないの!？」

フレイヤ「あなた、もう17なんだし、いいんじゃない!？」

フレイヤ「私が17位の際は、もうアッチコッチで戦っていたものよ」

イアン「いや、それは母さん達はそうだったろうけど」

フレイヤ「それに、私が止めたら、ううん、明日になったら、あなた、旅立つのをやめてしまうでしょう？」

イアン「まあ、それは多分そうなんだけどさあ・・・」

フレイヤ「じゃあ、今すぐ旅立ちなさい。」

イアン「うん・・・。」

フレイヤ「あなただけじゃ心配だから、途中まで、お隣のリンちゃんに付いてってもらいなさいな」

イアン「うん・・・。」

フレイヤ「都まで着けば、まあ大丈夫でしょう。」

イアン「うん・・・。じゃ、行ってくるよ。」

フレイヤ「行ってらっしゃい。頑張ってね。」

イアン「うん・・・。」

こうしてイアンは旅立つ事になりました。本当はもっとカッコ良く旅立つ予定だったの

ですが。

とりあえず、隣の幼なじみの家へと向かいます。

02

家を出たイアンはリンの家へと向かった。

リンの家は隣だが、田舎なので少し距離があった。

ちなみに、リンの父親はこの村の村長である。

リンの父「おや、イアン。久しぶりだな。ちょっと待ってろや。」

リンの父「おおい、リンや」

リン「はあい。」

リンの父「さっ、上がって行きなさい。」

イアン「あ、失礼します。」

リンの部屋

リン「久しぶりねえ。イアン、隣なのに、あんまり会ってなかったものね。どう、私、ずいぶん変わったでしょ？」

昔は普通の女の子だったリンだが、大人になって、背も伸びていたし、女ながら、大型の弓矢を使って猫やモンスターを狩ったりしている彼

女は随分遅しく見えた。何となく状況を聞いてただけだけど。

イアン「うん。なんというか、たくましい感じになったと思うよ。」

リン「ありがとう。イアンはあまり変わってないわね。」

イアン「うん。まあそうかもね。でも、僕はこれから旅に出ようと思ってるんだ。それでさ・・・、リンも、一緒に行かない？」

リン「・・・残念だけど遠慮しとくわ。私はこの村から離れる気はないの。」

イアン「・・・そう。じゃあ、僕ひとりで行くよ。」

リン「あら、意外ね。15歳までひとりで寝れなかったって聞いてるんだけど。大丈夫なの？」

イアン「母さんに聞いたの！？いや、一応最近は一りで寝れるようになったよ。」

リン「ふうん。じゃあもうひとつ聞いてもいい？イアン、あなた、モンスターを倒したことはあるの？」

イアン「・・・無いけど、都までは洞窟をって行くつもりだし、そこから先は王様にお会いして、護衛をつけてもらうつもりなんだ。」

リン「王様？そんなに簡単に会えるとは思わないんだけど、それに護衛って、あんたちよっと甘すぎるんじゃないの？何だかとても心配になってき

たわ。ちょっと今から訓練しない？後、心配だから、やっぱりついてってあげるわ。ただし、洞窟を抜けたとこまでよ。」

イアン「・・・ありがとう。訓練って？」

と、言うわけで、リンが仲間に加わった。

03

リン「じゃ、さっそく行きましょうか。」

ナワイへ村からカイアース街の近くまで続く洞窟、基本的にはモンスターもおらず、所々に魔法の明かりが灯っている、一部の人だけが知っている安全なルート。

イアン「ここ通るの久しぶりだなあ」

リン「昔はたまに遊びに来てたわよね。」

イアン「ここは明かりも点いてるし、あんまり奥まで行かなければ、そんなに怖く無いんだ。」

リン「私がいて、良かったわね。一人じゃここ抜ける途中で、帰ってきたんじゃないの？」

イアン「・・・否定できない。」

リン「うーん。もし、大ムカデでもいたら、とどめを刺させる訓練でもしようかと思ったけど、やっぱりやめておくわ。」

リン「あなたは、そのままがいい気がする。
カイアースまで行ったら、適当に都見物でも
して、帰って来なさいな。そういうのがお似
合いよ。」

イアン「うーん、そう言われると、そうでいい
気もしてきた。」

しばらく歩くと、イアンは洞窟の脇にある、
ちょっとした横道にそれた。

イアン「まだある。」

道はすぐ行き止まりだったが、そこには小さな
石板が置いてあった。

『・・・・・・・・クレア・バイル記す』

クレア・バイル記す。

イアンが好きな探検家、クレア・バイルが残
したかもしれない石板。本物ならある意味発
見だ。

小さい頃、イアンが勇気を振り絞って洞窟を
探検した時に、見つけたものだ。

憧れの探検家がここを訪れたと思うととても
ドキドキする。だから、イアンは少々怖いと
思いつつも、何度かここまでは訪れていた。

でも、こっから先は未知のエリアだ。メインのルートに戻って先に進む。

通ってみるとあっけなかった。むしろ村側より進みやすい位だ。

イアン「なんだ、意外と快適。」

リン「そりゃ、明かりもあるし。100年以上前からある洞窟だもの。」

リン「意地悪言っちゃえばね、さっきの石板も多分、何人かの人には見られてるわよ。」

イアン「えっ？」

『そう言われればそうか。大人にならないと気づかないこともあるな。』

イアン「・・・思い出は大切にしようと思う。」

リン「いい言葉ね。」

半日歩いて洞窟を抜けると、そこはカイアース街を眼下にみる坂の上だった。

イアン「うわぁいい景色だ。」

リン「素敵。」

しばらく見とれる。

手前に城があって、周りには林と湖、少し離れた所にオレンジの屋根の街並み、更に離れた所に大きな街並みが見える。その先は海。カイアースを含むアクア諸島周辺の海はちょっと特殊で、波はあまりなく、ほとんどしょっぱくもない。

これから夕日になろうかという太陽で、海面がキラキラと輝いていた。

イアン「日が暮れる前に辿り着かなくちゃ」

リン「じゃ、村で待ってるわね。」

イアン「・・・うん。じゃ、行ってくるよ。」

リンなら一人でも大丈夫だろう。ところでリンは都が嫌いなのだろうか？

ふと疑問に思ったが、声には出さなかった。

イアンはゆっくりと前を見ると、そのまま一気に坂をかけ降りる。

リン「速っ。」

イアン『僕にも得意なことはあるんだ。』

足の速さには自信がある。

カイアースの歴史上最速(逃げ足?)と言われている男の子の初ダッシュシーンだ！

大概のモンスター相手なら、これで逃げ切れるかも。

体験版はここまでです。

もしよろしければ、お気に入りか、ご購入いただけるとありがたいです。

ではまた。

2017、2、18 Clear First